様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４３７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１１８８４

研究課題名（和文）ガストロノミーを資源としたフードトレイルのマネジメントと創造性の研究

研究課題名（英文）Research on the management and creativity of food trail using gastronomy as resource

研究代表者
李　美花（LEE, MIHWA）

大阪成蹊大学・経営学部・准教授

研究者番号：３０６２６２８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の食による観光まちづくりの事例を精査し、カナダ・オンタリオ州のApple Pie Trail事例調査を通じて、競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルを提案することを試みた。その結果、DMOを中心に地域の自然・歴史・文化といった地域資源を全面的に活用するとともに独自性が引き出し、ストーリー・テーリングを活用したことでオーセンティック（真正さ）が伝わるといった示唆点が得られた。それらの示唆点を参考に、日本ならではの文化や自然・歴史といった資源を活用しながら、日本独特な小売店施設の「道の駅」を結合することで競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルが考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フードトレイルの研究は食と観光ビジネスの関係を巡って展開されて来た。特に2015年からUNWTO（国連世界観光機関）により開催されているガストロノミーツーリズム世界フォーラムなどに見られるようにガストロノミーのマネジメントと創造性の発揮が観光政策の主要な課題となっていた。そうした課題へのソリューションとなる本研究により新たなフードツーリズムの競争優位モデルの具現化につながる学術的創造性を有すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined examples of tourism urban development through food in Japan and attempted to propose a model for a Japanese version of food trail with a competitive advantage through a case study of the Apple Pie Trail in Ontario, Canada. As a result, we obtained suggestions that uniqueness can be brought out by fully utilizing local resources such as the natural, historical, and cultural resources of the region, centered on the DMO, and that authenticity can be conveyed by using storytelling. By referring to these suggestions, we can expect to develop sustainable and competitive Japanese food trails in the future. Based on the suggestions from this study, a model of a Japanese food trail with a competitive advantage can be conceived by combining Japan's unique retail facilities, "Michi-No-Eki," with resources such as culture, nature, and history that are unique to Japan.

研究分野：経営学

キーワード：フードトレイル　食の街道　マネジメント　オーセンティック　ガストロノミー　フードツーリズム　観光まちづくり　資源

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、世界的にガストロノミー（食文化）と観光の関係が都市や地域の観光開発にとって競争力を高める重要な戦略として注目されている。そもそも旅行者にとって食と文化を楽しむことこそ観光アトラクションとして観光動機そのものでもある（尾家、2010）。フードツーリズムにおいて食と文化は大きい旅の動機・主な目的となる。食は観光地に欠かせないものであり、その地域でしか味わえない非日常的な経験、すなわち食と文化に触れられる活動は旅行者にとって魅力的である。

日本において「食による観光まちづくり」は 1985 年頃に B 級グルメによるまちおこしから始まり、2000 年代には B 級ご当地グルメ団体の全国組織化によるフードイベントによって活況を呈し、現在では「食の街道」と呼ばれるテーマ性を活用した手法が主流になった。一方で欧米においては 2010 年前後に「フードトレイル」と称した観光プロモーションが普及し始め、その後フードツーリズム開発の手法として確立されてきた。フードトレイルは 1990 年代から英語圏を中心にした欧米各地で開発され始まったフードツーリズムの一手法である。

これまでのフードトレイルに関する研究は食と観光ビジネスの関係を巡って展開されて来た。特に 2015 年から UNWTO（国連世界観光機関）により開催されているガストロノミーツーリズム世界フォーラムなどに見られるようにガストロノミーのマネジメントと創造性の発揮が観光政策の主要な課題となっていた。そうした課題へのソリューションとなる本研究により新たなフードツーリズムの競争優位モデルの具現化につながる学術的創造性を有すると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、国際観光時代における日本のフードツーリズムの競争優位性を構築するべく、競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルを提案することである。これまで筆者らは、フードツーリズムの全般的な研究を通じ、日本の食による観光まちづくりの事例を精査し、カナダ・オンタリオ州の Apple Pie Trail 事例調査を通じて、競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルを提案することを試みた。その結果、DMO を中心に地域の自然・歴史・文化といった地域資源を全面的に活用するとともに独自性が引き出し、ストーリー・テーリングを活用したことでオーセンティック（真正さ）が伝わるといった示唆点が得られた。それらの示唆点を参考に、日本ならではの文化や自然・歴史といった資源を活用しながら、日本独特な小売店施設の「道の駅」を結合することで競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルが考えられる。

３．研究の方法

研究代表者らは欧米の「フードトレイル」と日本の「食による観光まちづくり」や「食の街道」の構造的な違いに着目し、それらの比較研究がフードツーリズムのイノベーションにつながると仮定した。そして、欧米のフードトレイルの理論と実践を検証した上で、各研究分担者の専門的視点（ステークホルダーのマネジメント、ガストロノミー体験と観光、ネットワークと社会関係資本）による分析を加え、日本のフードツーリズムの競争優位モデルを構築することを試みた。さらに先進的なカナダ・オンタリオ州を事例として現地調査を行い、地域のガストロノミー資源のマネジメントと創造性について研究して来た。

４．研究成果

フードトレイルとは、1990 年代から英語圏を中心にした欧米各地で開発され始めたフードツーリズムの一手法である(Oie & LEE, 2018)。日本でも欧米と名称は異なるが、フードトレイルとほぼ同じ概念の「食の街道；Syoku-No-Kaido」という名称で周遊型フードツーリズムがある。

カナダ、英国、アイルランド、オーストラリアの国々のフードトレイルの多くは農村部や小都市の地域に存在する。代表的なフードトレイルは、カナダオンタリオ州の「アップルパイトレイル」、米国ケンタッキー州の「Urban Bourbon Trail」、英国スコットランドの「Seafood Trail」などが挙げられる。欧米のフードトレイルの構成は、基本的に地域の食に関わる生産・加工部門、ガストロノミー部門（飲食サービス）と観光（小売り、宿泊、諸施設）の 3 つ部門のステークホルダーのネットワークにより組織的に運営される。アップルパイトレイルの場合は、生産・加工（Production）、ガストロノミー（小売・飲食：Gastronomy）、観光（地域の観光リーダー：Tourism）が一体となって運営される(Oie & LEE, 2017)。しかしその地域の観光特性、地理的条件や産業特性により欧米のフードトレイルが必ずしも 3 つの部門で成り立つわけではない。さらにそのテーマ設定と組織メンバー構成は地域の特性によって多様である。

そこで、本研究では生産、ガストロノミーと観光といった参加者のビジネスに基いたフードトレイルのコンセプトを 3 つのタイプ、(1)多種ビジネスタイプ、(2)特産物タイプ、(3)名物料理タイプ、に分類した。

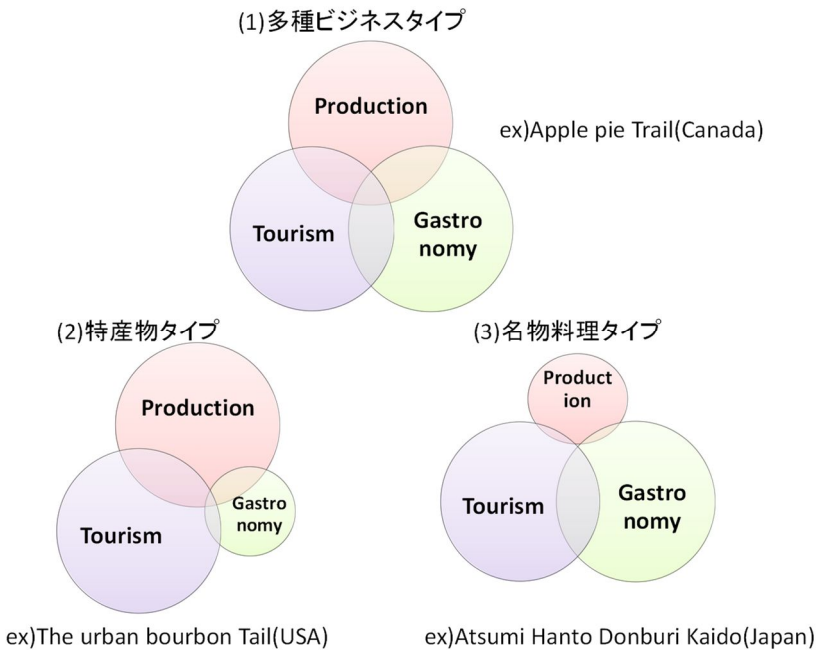

図 1　フードトレイル・コンセプト 3 つ

欧米のフードトレイルは「図 1、(1)」のような「多種ビジネスタイプ」のマルチビジネスによって経営されるのに対し、日本の「食の街道」は生産者が参画することはまれで、飲食店が主体となった「図 1、(3)」の「名物料理タイプ」が主流である。たとえば、日本では「あつみ半島どんぶり街道」のように「街道」と称する取り組みの場合、地域の名物料理をテーマにしたメニューによる飲食店を主体として構成される。単一食材・メニュー

の PR に集中されることが多い。ここで名物料理とは具体的に郷土料理、B級ご当地グルメ、食の街道プロジェクトのために開発された特別料理を指す。この名物料理タイプは、消費者が生産地や生産者に直接ふれあいを持つことはできない。とはいえ生産との関わり合いが希薄とは言え、たとえば全国各地でみられるどんぶり街道の場合、提供する料理の食材が「地元の産物を利用した材料を使用すること」（渥美半島の場合）や「奥能登産のコシヒカリ、水及びメインの食材に地場でとれた旬の魚介類、能登で育まれた肉類・野菜又は地元産の伝統保存食を使用しています」（奥能登の場合）のように条件づけられている。さらに生産とガストロノミー及び観光との相互関係によって生じる食品・飲料品や生産景観（フードスケープ）がフードトレイルにおいて強調されることはないが、消費者は生産部門を「道の駅」といった日本独特な小売店施設で体験することができる。生産者が参画することは稀の「名物料理タイプ」が主流である「食の街道」に日本の独特な小売店施設である「道の駅」を結合することで、消費者は生産地（生産者）に間接ではありながら触れることができるのである。つまり、日本ならではの文化や自然・歴史といった資源を全面的に活用しつつ、日本の独特な小売店施設である「道の駅」を結合することで独自性が引き出された競争優位性のある日本版フードトレイルのモデルが考えられる。

今後、日本の「道の駅」のような生産から消費に至るプロセスに沿った日本型フードトレイルモデルを実証的に模索する研究が必要である。この点については今後の研究課題として位置づけている。最近、日本においても欧米型フードトレイルを意識したような動きがあるが、欧米のフードトレイが成功したからと言ってむやみに日本に当てはめることは避けるべきであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 尾家建生	４．巻 21号Ⅱ
２．論文標題 フードツーリズムからガストロノミーへのパラダイムシフト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 平安女学院大学研究年報	６．最初と最後の頁 01-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 第2403
２．論文標題 地方都市と農村におけるフードツーリズムの観光商品化(1)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊農林	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 李美花・中子富貴子	４．巻 64
２．論文標題 カナダオンタリオ州におけるフードトレイルの成功要因	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本近代学研究	６．最初と最後の頁 261-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 1
２．論文標題 場所の味覚、フードトレイルと価値共創	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本観光研究学会	６．最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 第2406
２．論文標題 地方都市と農村におけるフードツーリズムの観光商品化（2）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊農林	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 第2410
２．論文標題 地方都市と農村におけるフードツーリズムの観光商品化（3）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊農林	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 第2412
２．論文標題 地方都市と農村におけるフードツーリズムの観光商品化（4	５．発行年 2020年
３．雑誌名 週刊農林	６．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾家建生	４．巻 0
２．論文標題 広域フードトレイルと価値共創の研究‐ポストコロナの観光価値共創に向けて―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本観光研究学会第35回全国大会論文集	６．最初と最後の頁 197-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中子富貴子	4．巻 第1号
2．論文標題 フードトレイルにおける「集積」と「周遊」に関する考察：石川県・能登丼を事例に	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本フードツーリズム学会年報『フードツーリズム研究』	6．最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 李美花
2．発表標題 ガストロノミーを資源とした日本型フ ードトレイル
3．学会等名 韓國日本近代學會第44回 國際學術大會,非對面(On-line) 學術大會（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 中子富貴子
2．発表標題 フードトレイルにおける「集積」と「周遊」に関する考察 ：石川県・能登丼を事例に
3．学会等名 日本フードツーリズム学会年報『フードツーリズム研究』2022年
4．発表年 2022年

1．発表者名 李美花
2．発表標題 ガストロノミーを資源とした日本型フードトレイル
3．学会等名 韓国日本近代学会（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 尾家建生
２．発表標題 フードツーリズに見る価値共創の予備的研究
３．学会等名 観光学術学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 尾家建生
２．発表標題 広域フードトレイルと価値共創の研究
３．学会等名 日本観光研究学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 李美花・中子富貴子
２．発表標題 Current Situation of Food Trail (Apple Pie, Chocolate, Bacon/Ale) in Ontario, Canada
３．学会等名 Ming Chuan University 台湾台北、the 2nd GLOSITH conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 尾家建生
２．発表標題 場所の味覚、フードトレイルと価値共創
３．学会等名 日本観光研究学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中子富貴子
２．発表標題 日本におけるガストロノミーツーリズム
３．学会等名 Pacific Tourism Forum（ロシアウラジオストク）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中子富貴子
２．発表標題 食と観光（フードツーリズム、フードトレイル）
３．学会等名 こまつ市民大学:市民向け講座1回～5回（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 李美花・尾家建生・中子富貴子
２．発表標題 カナダ・オンタリオ州におけるフードトレイル実態調査報告
３．学会等名 日本フードツーリズム学会（第1回研究発表会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 李美花
２．発表標題 地域の食と文化資源を活用したマーケティング手法
３．学会等名 韓国日本近代学会（38回要旨集）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 尾家建生
２．発表標題 ガストロノミーツーリズムの商品開発に見るDMOの役割
３．学会等名 日本観光研究学会（全国大会学術論文集第33回）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中子富貴子
２．発表標題 フード・トレイルにおけるマネジメントと協力体制
３．学会等名 日本観光研究学会（全国大会学術論文集第33回）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	尾家　建生 (0ie Tateo) (30441124)	大阪府立大学・研究推進機構・客員研究員 (24403)	
研究分担者	中子　富貴子 (Nakako Fukiko) (80636358)	公立小松大学・国際文化交流学部・教授 (23304)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関